

# 建設委員会行政視察報告

日程：平成24年8月8日（水）～平成24年8月10日（金）

視察先：岩手県盛岡市、宮城県仙台市

参加者：杉原委員長、牧尾副委員長、重光委員、西本委員、新開委員、早志委員、坂本委員、杉井委員

執行部職員4名、事務局随員1名

## ◎岩手県盛岡市（8月9日）

【人口】 291,880人 【面積】 886.47k㎡

### ◆調査事項

#### 「盛岡駅西口開発について」

#### ・事業概要

##### ○盛岡駅西口開発コンセプト

「もりおか」は、みちのくの小京都、杜と水の都ともいわれ、歴史、文化、人情が風格と落ち着いた雰囲気を醸し出す街で、北東北の中央に位置し、十和田湖、八幡平、三陸海岸、平泉などへの交通拠点で、岩手山、北上川といった雄大な自然にめぐまれ、南部鉄器などの伝統産業を育み、岩手県の政治、経済、文化、芸術などの中心である。

盛岡駅西口地区は、この「もりおか」の玄関口である盛岡駅に隣接した地区で、新しい都心地区の形成を目指し、盛岡城築城による“まちづくり”以来の大規模な都市開発事業を進められている地区である。

開発基本コンセプトに「あそびどころ・ふれあいのまち」とし、このコンセプトに盛り込まれた盛岡駅西口地区開発の基本的考えかたは、新しい盛岡市の都心地区にふさわしい都市活動を実現する内容のものとして、次のような都市の実現を目指されている。

- ①人・情報・技術が「であい」「ふれあい」「交歓・交流する」、新たな“いち”をつくる
- ②職(先端・頭脳産業の集中地区)・住(アメニティあふれる居住空間)・遊(若者が楽しめるアミューズメント・エリア)が一体となった魅力ある都市をつくる本物のヒト、モノ、サービスにふれることのできる都心をつくる

##### ○盛岡が目指す都市拠点形成

拠点を1つの都市軸に、盛岡は、現都心部への一点集中型の都市構造から生じる都市整備



西口開発地区の模型

上の課題に対応しつつ、魅力ある都心を創出するために、複合的・相乗的な都心の活力を創出する都市構造の再編を推進。

盛岡の軸状都心を形成する拠点は、城下町としての成り立ちの既存都市地区、新市街地として都市再生機構などにより事業化を図る盛岡南地区開発、そしてこの2つの都心の真中に位置するのが盛岡駅西口地区である。

盛岡駅西口地区は、新しい都心地区の形成という観点から、商業業務地区におけるゆとりと潤いのある都市空間、魅力ある街並みの形成を図るとともに、住宅地における良好な住環境の保全を図るため地区計画を定めている。

●位置：盛岡市盛岡駅西通、新田町、城西町および中川町地内

●面積：約 35.2 ヘクタール

## ・地区内の主な施設

### ①地域交流センター・MARIO S

盛岡駅西口地区開発の先導的・中核的施設で平成9年11月に総事業費207億円、20階建て、総床面積52,625㎡という北東北随一のインテリジェントビルとして開業。利便性のよさとシンボル性を持っていることから人気が高く、現在の入居率は98%とほぼ満室状態。4者の合築、5者の区分所有ビルで、地下には地域冷暖房施設や変電所も組み込まれている。20階の展望室からは、周囲の山並みや市街地を一望することができ、お正月には、初日の出が迎えることができる。また、MARIO S内の施設等には、パイプオルガンを備えた市民文化ホール、旧国鉄盛岡工場の外壁がある。



※「MARIO S (マリオス)」の愛称…公募により5,044点の中から選定された。このビルが持つ6つの機能の英単語の頭文字を組み合わせた造語である。

「M」=MART「商店」商業施設、「A」=ART「芸術」文化ホール、美術展示室、「R」=LIFE「生活」地域冷暖房施設、「I」=INTELLIGENCE「情報」高度情報センター、「O」=OFFICE「会社」企業、「S」=SIGHT-SEEING「観光」物産観光施設、展望室

### ②西口バスターミナル（交通広場2階）

盛岡の代表的地場産業「南部鉄器」の代表的な地肌・南部あられ文様の柱に支えられたキャノピーが印象的である。柱には、南部鉄器で作られた白鳥やふくろう、昆虫などが飾られている。在来の東口バスターミナルは主に市内系統のバスの発着に利用されていましたが、西口バスターミナルは主に都市間バスと観光バスに利用されている。1階はタクシープールとタクシー乗り場、駅利用者の一般車輛の乗降場として利用されている。

### ③盛岡駅東西自由通路「さんさこみち」

平成9年度からJRのホーム連絡橋を供用し東西暫定自由通路として利用していたものを、専用の自由通路として平成21年6月から供用開始。盛岡市制施行120周年事業の一環として

募集した盛岡駅東西自由通路の愛称は「さんさ こみち」に決定された。

## ・委員の感想

○南の仙台市、北の青森市、西の秋田市、北東北3県のほぼ中央に位置しており交通の結节点となっており、線路も駅周辺は高架となっており道路は高架下を何本も横断していて車輛の移動は容易であった。

北東北の拠点都市を目指して早くから一点集中型の都市構造から生ずる整備上の課題に対処しながら複合的、相乗的な都市づくりをされておる。

○西口開発の話が持ち上がったのは昭和53年と聞く。その後、昭和60年に旧国鉄盛岡工場が廃止となり、本格的なまちづくりを進めるため、国鉄盛岡工場跡地利用対策協議会を立ち上げ、開発事業を進められた様である。整備を進める上ではこの旧国鉄盛岡工場跡地を利用することで非常に優位であったと思う。羨ましい条件、状況であったと思う。今後は早急に完成にもっていき、中心市街地の整備に取り組む必要性を感じる。



○開発前の盛岡駅は東側からしか利用できなかったが、西側からも利用できるよう、自由通路を設け鉄道利用の利便性を高めている。また、歩行者の導線は周辺の歩行者専用道路への結びつけで、公園や公益施設へのネットワークを構築している。このことは、西条駅の南北通路を建設中の当市の先例として着目されるもので、単に自由通路のみの建設だけでなく、市役所・地域センターサンスクウェアそして計画中の市民ホール等へ、歩行者の自然な流れを誘導すべく、アーケード構造とか、分かりやすい案内板などの整備も検討項目に入れるべきと思われる。盛岡では「電線の地中化」をもって都市景観の形成が諮られており、このことは学園都市の入り口となる西条駅周辺整備においても見習いたい部分である。

○盛岡駅西口地区は、現（従来の）都市部への一点集中型の課題に対応するため、都心を軸上に連担させる新しい中心地「都市軸構想」。新幹線や高速道路へのアクセス性に優れ、広域アクセス性、そして産業が集積する高密度新都市としての役割を担える位置づけにある。旧国鉄盛岡工場等の廃止に伴う大規模な空閑地の形成による都市機能の充実を図るため平成5年に都市計画決定され事業着手となった。（盛岡駅、西口地区完成記念誌から）東広島市、そして他市でも同様である一点集中している都市構造に対して、うまく地形を活用して解決している。将来を見すえた、しっかりとした計画のもとに事業計画を検討する必要がある。

○整備の経過において、住民の協力による事業推進活動があり、住民と行政がいつも情報を

共有できている所が素晴らしいと思った。また、地区中の代表的な施設に地域交流センター・マリオスがあり商業施設・文化ホール情報センター・企業オフィス・観光施設等があり入居率98%と満室状態でセンターと駅が自由通路でつながり、また、周辺にバスターミナル等利便性を感じた。

- 現地は盛岡の玄関口としてのものにふさわしく考えて進められておられるのはわかった。

したがって盛岡がめざす都市形成は3つの異なる拠点をまとめた一つの都市軸にするべくすすめられていた。

一つではなしえない複合的活動を創出する都市構造をするためにとの説明があった。西地区が新しい都市地区の形成ということからゆとりとうるおいのある空間、魅力のある街並みの形成をしたとされている。よく検討されていると思った。

- 良好な市街地景観の形成計画で、ふるさとの顔をモデル地区区画整理事業を導入され、「あそびこころ、ふれあいのまち」をテーマに地区の顔を形成するために、融雪装置や、電線等地中埋没など、高質・高品位な公共施設整備をしている。

また、各道路に、植栽・照明灯・サイン・モニュメント等で個性を持たせた、整備がしてある。

- 東広島市と人口規模で比較すると、10万人程度盛岡市が多いが、盛岡駅周辺は都市整備事業を円滑に進められ、主要道路の渋滞回避のためアクセス網の充実、西口バスターミナルの整備、盛岡駅東西自由通路の整備などをされ、人・自動車・バス・電車の交通の利便性が非常に良かった。また、中核的施設としての



盛岡駅東西自由通路「さんさ こみち」

「マリオス」は複合施設として、98%と非常に高い入居率で、最上階は市内を一望できる観光スポットがありとてもよい施設であると感じた。本市も西条駅に南北通路を建設中で、さらには、市民ホールも建設予定の東広島市においても、今後の都市整備に非常に参考となる点が多くあったと感じた。

## ● 宮城県仙台市（8月10日）

【人 口】 1,011,592人 【面 積】 785.85k㎡

### ◆調査事項「南蒲生浄化センターの復興について」

#### ・被災状況

平成23年3月11日に発生した地震と巨大津波により、仙台市の下水（汚水）の約7割を処理する南蒲生浄化センターは、機械・電気設備の水没、構造物の破損や機器流失などの破壊的な被害を受け、特高受電鉄塔の倒壊による電源喪失もあり、処理機能が停止した。

視察資料より



#### ・応急復旧の取り組み

**復旧指針**：震災直後は、電気・ガス・水道などのライフラインが停止し、汚水量が激減したが、ライフラインの復旧にしたがい、汚水量が増加し、衛生環境の悪化が懸念されたため、次の3つの方針を定め、応急復旧に取り組まれた。

- ①市民のトイレ利用を継続させること
- ②流下機能の確保によりマンホールから汚水が道路上に溢れ出すことを防止し、衛生環境を保持すること。
- ③上記の目標達成後には、公共用水域（河川や海など）の水質保全対策を順次進めること。

**具体的な取り組み**：南蒲生浄化センターでは、巨大津波により処理機能は喪失したが、市街地から下水処理場までの地形的要因や施設配置の特性により、無動力の自然流下による簡易処理が可能であったため、閉塞した放流ゲートを開放することによって、太平洋への放流機能を確保することができた。

被災当初は通常の処理が行えないため、下水中の固形物の沈殿と消毒剤添加による簡易な処理を行っていたが、平成24年3月末に微生物を利用した暫時的な二次処理（接触酸化法）を本格稼動した。国土交通省による「下水道施設の復旧にあたっての技術的緊急提言」を踏まえ、早期の復旧を目指し、段階的な放流水質の改善に取り組んでいる。

汚泥処理は、震災後約1ヶ月後には仮設脱水機による汚泥脱水を開始し、現在は、既存の脱水機に切り替えることにより脱水機能を向上させている。

## ・震災から学んだもの（ソフト面の評価）

- ・「大都市間災害時相互応援協定」に基づいて、震災後約1ヶ月間に12都市、延べ1,630名の支援を受けて、菅きよの被害調査を迅速に実施できた。
- ・平成17年に管路管理事業者団体と締結した災害時の支援協定に基づき、早期に日が情報の収集体制が確立できた。
- ・平成18年度に下水道災害対策マニュアルを整備し、さらに平成22年度からは事業継続計画の策定にも取り組んでいたこともあり、南蒲生浄化センターや設備管理センターでは、速やかに初動体制に移行することができた。
- ・地震などの被災時に菅きよ調査の拠点となる下水道管理センターでは、自家発電設備や緊急対応用の資機材配備等により、速やかに初動体制が構築された。
- ・アセットマネジメントの取り組みにより、菅きよ台帳・施設台帳のデータベースを構築していたことから、被害情報を地理情報システムデータとして把握、整理することが可能となり、効果的・効率的な調査・復旧作業が行うことができた。



復旧が進む南蒲生浄化センター

※アセットマネジメント…下水道事業の目標を達成するために、下水道施設の持つ性能やリスク、必要なコストなどを最適かつ持続可能に管理する一連の活動のこと。

## ・委員の感想

- 昨年の3月11日の地震の被害は処理場を中心に広大な地域に及んでいた。  
この浄化センター等の施設の復旧は仙台市が下水道の発祥の地と自負している通り、すべての施設をしっかりと掌握していたからだと思う。  
東広島市においても事故に対応できる体制作りが急務と思える。プロフェッショナル的な人材育成が必要！
- この度の3.11の地震による被害は、神戸にくらべ液状化等の被害にあったものの建造物への被害は少なかった様であるが巨大津波による被害は無い様であったが液状化による被害が多く見られた。通常の処理機能は喪失したが幸いにも市街地から処理施設までの地形的要因でポンプを使用せず自然流下で簡易処理が出来たことは不幸中の幸いであった様に思う。  
想定外の被害を受けたが手動バルブの件等を含め事と事の次第によっては被害を最小限度に抑えることを再認識させられた行政視察であった。被害者に謹んでお見舞い申し上げます。
- 壊滅的な被害に遭った当浄化センターの視察では、自然の破壊力の大きさを、まざまざと目にすることができた。  
被災した本市説の応急処置として、微生物を利用した接触酸化処理施設が設置されてお

り、汚泥の発生量が少ない処理法として、その有効性を確認体感した。

東広島市の内陸地では、このような災害に遭遇することはほぼ無いであろうが、災害対応策として、平素から施設の点検管理を十分に行うことは大事な事業であると思われる。

また、災害に限らず、何らかの原因で施設が停止した場合も考慮に入れ、代替施設の研究を行っていくことも重要であると思われる。

- 地震の被災地、仙台市の太平洋沿岸に在る南蒲生浄化センター。太平洋に面しており、直接津波を受け大きな損害となっている。人口約102万人（仙台市）の内、約71万人、日に約398、900m<sup>3</sup>（約70%）の汚水を処理する。被災直後から、復旧のために、3つの方針を定めて取り組んでいる。①トイレ利用の継続②流水機能を確保し、汚水の溢水防止③公共用水域の水質保全対策。早期対応（応急復旧）とともに、平成27年度を目標に「仙台市下水道震災復興推進計画」に取り組んでいる。いずれにしても、センターの状況を学び、東広島市においても、災害に強く、環境に優しい下水道を目指していく必要性がある。

- 説明を聞き現地の視察を行い、津波による被災状況のすごさにあらためて災害のすごさを実感した。安心安全なまちづくりの重要性をあらためて思った。

- 地震によりかなりの被害をうけていた。その恐ろしさを感じた。その傷跡はすさまじいものを感じた。そのため施設全体の改築が必要とされている。管理者による迅速な対応により人的被害がなかったことは不思議に思うくらいだ。一日も早い復興を望むものである。将来これら天災を見る時、管理者の平素の心構えが最重要と思った。

- 仙台市の下水道は、明治32年に東京、大阪について全国で3番目に事業着手されたといわれている。南蒲生浄化センターは、仙台市の汚水の約7割、日平均で32万m<sup>3</sup>の下水処理を担う下水処理場であったが、平成23年3月11日発生した、地震と津波により、処理機能に壊滅的な被害を受けた。（被害額725億円）

下水道は、公衆衛生の確保、生活環境、浸水の防除による安全・安心の確保など重要な役割を担う都市基盤であり早期の復旧がされることを期待している。

微生物を利用した暫時的な二次処理(接触酸化法)

